

所属機関・部局・職名: 大阪大学薬学研究科 特別研究員(DC1)

氏名: 八幡 健三

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

化学分野とは言っても非常に講演内容は広範にわたっており、受賞者はそれぞれ基礎的な内容から最近の話題までを丁寧に説明していた。多くの公演はユーモアを交えて視覚的に訴えるプレゼンとなっていたが、講演者によっては専門外であったこともありほとんど理解できないものもあった。特に鈴木先生や Schrock 先生が講演された私の専門分野でもある有機化学の内容は、専門外の人には発見のインパクトや重要性が伝わりにくいと感じた。ノーベル賞受賞の研究とはいってもプレゼンの方法によって伝わり方が異なることは、私たちが研究内容を伝える際にはより一層の注意が必要であると感じた。

また、趣味の曼荼羅をラマン解析するという一風変わった講演をされた Ernst 先生は研究以外の活動などを通して視野を広げる必要性について説明されており、他にも研究には信念と時間が必要であると述べていた先生もおり著名な先生方の人生や研究哲学も学ぶことができたことは、一般の学会などでは経験できない貴重なことであった。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やボート・トリップ等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

研究内容に近い受賞者では鈴木教授、Grubbs 教授とお話することができた。研究について話をする中で二人とも人に使ってもらえる反応を開発することが重要だ、という共通の意見を有していることが印象的であった。研究を開始する時点では自分がおもしろいと思った課題に打ち込めばよいが、成果を出すことができた後はその研究結果がどのように世の中に貢献できるか、どうすれば世間一般に用いられるものになるかという点にも注力する必要があるということであった。確かに化学、特に化学反応の開発の分野では、いかに興味深い現象を見出してもそれが使われなければ世の中に貢献することはできないため、この意見にはとても共感することができた。

また、専門的な研究に関する話もしていただくことができた。この二名はパラジウムやルテニウムといった金属錯体を用いたクロスカップリング、メタセシス反応でノーベル賞を受賞しており、研究内容が近いとはいえ、非金属反応の研究を行っている私とは専門が少し異なると言える。そのため、金属のリガンドの設計など金属化学を研究する上で重要な情報を学ぶことができたのは、今後私の研究の分野を広げていくうえでも非常に貴重な経験であった。さらには、私が行っている研究に関しても深いディスカッションをしていただくことができ、有益なアドバイスまでしていただくことができた。この専門にとらわれない幅広い知識が優れた研究成果につながるのだろうと実感した。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

様々な国、世代の研究者と話をすることがあり、国による学位の制度などの違い、それぞれの良い点、悪い点について意見を交換することができた。また、海外の研究者は学部、修士、博士などで専門分野を大きく変える人が多くいることに、日本との違いを実感させられた。若いうちに多彩な専門知識を身に付けておきたいという考え方は日本も取り入れるべきではないかと思った。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

今回最も刺激を受けたと言えるのが日本人参加者との交流である。海外学振や HFSP などの支援で留学中の方や大学院生、企業で研究を行っている方、海外ですでに PI になられている方など様々な人たちと知り合うことができた。アカデミック志望の人、企業志望の人など進路は異なるがみな共通して非常に高い志を持って研究に取り組んでおり、多くの刺激を受けることができた。日本人参加者とは SNS などコミュニティをつかって今後も連絡が取りあえるようにしてあるので、互いに刺激し合い協力し合えるような関係を築いていきたい。

5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット、具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載すること。

共同研究といった具体的な話をできたわけではないが、様々な分野の同世代の研究者と知り合うことができ、連絡先も交換することができたため、今後それぞれが独立した後にそういった研究ができたらと思う。また、他分野で取り上げられている問題やホットな話題を共有することができ、研究の視野を広げることができた。

6. リンダウ会議への参加を通して得られた以上の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

研究者として日本に貢献できることは研究成果を挙げることで優れた研究者を育てることだろう。本会議では多くの刺激を受けることができ、多少なりとも研究の視野を広げることができたと思う。この思いを忘れずに研究に励み、そして次の世代に伝えていきたい。

7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージがあれば記載すること。

業績や語学力などリンダウ会議への応募をためらう要因は人それぞれあるかと思うが、応募しなければ参加できないし、参加しなければあれほどの貴重な経験を得ることはできない。迷う前にとりあえず応募することを勧める。